

勝連城跡

グスクとして知られる琉球王国の城は、13世紀から16世紀にかけての琉球の繁栄の時代が現代に遺した偉大な史跡です。この時代に琉球は複数の領国の集まりから主権と広範囲にわたる海外貿易を享受する統一王国へと発展しました。グスクは軍事・居住・祭祀のための設備を持ち、防衛的な機能と宗教的な機能を兼ね備えていたようです。わずかな史料しか残っていないため、グスクの建設と利用に関する数多くの謎は未解決のままです。勝連城も例外ではありません。勝連半島にそびえ建つ勝連城の高みからは海と全方向の地形が一望できます。この城は、15世紀にこの地域を統治した領主「阿麻和利」の盛衰と深い関わりを持っています。

沖縄の石造りの城の建設は、日本本土よりも約100年早く始まりました。日本の城と同様、琉球の城はいつものしっかりした囲い（郭）で区画が分けられており、堅牢な区画ほど高い場所にあります。しかし、日本の城の直線的なつくりとは異なり、琉球の城には見事な曲線を描く石灰岩の壁があります。勝連城では、このような巨大な石灰岩の壁に囲まれた5つの区画が異なる階層に配置されています。元の木造の建築物は全く残っていませんが、考古学の研究により、最も重要な建物群の大きさと配置、そしてそこに住んでいた人々の生活様式についておおよそのことが分かっています。この城には複数の立派な門があり、洗練されたつくりの大きな木造の殿舎がひとつありました。勝連城をはじめとする琉球の城を建設した人々は、日本の城のように多層階構造の大きな天守を用いるのではなく、丘陵の自然な地形を活用しました。

沖縄に現存する主な城跡には勝連城跡の他に、首里城、中城城、今帰仁城、座喜味城があり、これらは全てユネスコの世界遺産に登録されています。